

[事例報告]

コロナ禍のオンライン 国際協働学習

複言語・マルチモーダルなリソースを用いてつながる経験がもたらすもの

村田晶子

むらた・あきこ

1. はじめに

コロナ禍で国際移動が停止する中、オンラインで国境を超えて言語文化的に多様な学生がつながり、交流し、学び合う活動、バーチャル・エクスチェンジ (Virtual Exchange) (以下、VE) が注目を集めている。VEはテクノロジーを利用して、地理的に離れた人々がつながり、学びあう教育的プログラムを指し、日本においてもCOIL (Collaborative Online International Learning) などの名称で大学を中心としてオンラインでの複数の国の教員が連携した協働学習が盛んになりつつある (池田 2015)。VE自体は新しいものではなく、1990年代から欧米を中心に外国語教育、異文化コミュニケーション、ビジネス研修、NGOの国際教育プログラムなど多様な分野で行われてきた教育実践であるが (O'Dowd 2018)、2020年に顕在化したコロナ禍により海外留学が困難になる中で、こうしたオンラインの国際協働学習を模索する教育機関が増加し、その注目度は高まっている。

しかし、VEの研究はまだ日本においては歴史が浅く、教育機関によるプログラムレベルでのVEの実施概要が発信されているものの、具体的に参加者がオンラインでどのような学びあいを行ったのか、協働プロセスに踏み込んだ研究は十分には行われていない。テクノロジーを用いた国際教育の一環として、

VEのようなオンラインでの協働的な学びは今後も拡大していくことが予想され、その教育的な意義を明らかにすることは重要な意味をもっている。

こうしたことを踏まえ、本稿ではコロナ禍で国境を超えて学生達がオンラインでどのような協働活動を行ったのか、日本とベトナムの大学が行ったVEの活動プロセスを分析し、パンデミック危機下における新しいバーチャルなコミュニケーション体験として、VEにはどのような意味があるのかを分析する。

2. 理論的背景

国境を超えたオンラインの協働学習は、リアルな国際移動を伴う留学との対比で語られることが多い。リアルな留学や国際体験プログラムは、経済的な負担が大きいため、実際には裕福な家庭環境の学生が参加する傾向にあり (European Commission 2019)、留学がエリート層のための社会的再生産の機会になっているにすぎないという批判もなされている (Gérard & Sanna 2017)。それに対して、オンラインでの交流や協働学習は、物理的な留学と比べて経済的な負担が少なく、一部の裕福な学生だけでなく、大学のより広い層の学生に国際教育の機会を提供する、包摂的な国際教育としての可能性をもっている。新しい国に物理的に移動する場合、その国の文化や言語を習得し、適応することが求められるが、VEは特定の地域や国への移動を前提としない、オンラインという第三の空間 (third space / third place) (Kramsch 1993, 2009; Bhabha 1994) でつながり、学び合うための活動であり、複数の教育機関に所属する学生が、オンラインの中間地点でつながり、共通の目標に向かって取り組むことで、どちらか一方が他方から学ぶのではない、双方向の学び合いが期待される。

Bhabha はポストコロニアル理論において、植民者と被植民者の間の文化の表象は、非対称に固定化、本質化されたものではなく、翻訳、模倣、再歴史化、転用などのプロセスの中で変容し、新たな視点を生み出す可能性をもったハイブリッドな中間地点、「第三の空間」でのダイナミックな実践であると指摘している。Kramsch はこうした第三の空間の概念を援用しつつ、外国語教育の場もまた第三の空間として、母語規範や本質化された文化の教え込みを越えた、ハイブリッドで創造的な対話空間としての可能性を秘めていると述べる。こう